

社会科の授業を対人援助学の視点から⑪

2025 年 11 月 内田一樹

0.はじめに

前回は「応答責任」と「興味」「関心」という概念から東日本大震災の被災地である宮城県石巻市、及び福島県浜通りを訪れるスタディツアーでの学びについて考えた。

前回も書いたが、対人援助学・対人援助職・対人援助者につながる視点、「種」のようなものを植えることが高校社会科の授業ではできるのだと感じている。それは小学校や中学校とは違う高等学校の発達段階にある子どもたちだからこそできるものでもある。小学校や中学校で学んできたことや自己のアイデンティティについて考える時期（進路やキャリアともかかわるかもしれない）だからこそ、子どもたちが見つけることが「種」があると思うのだ。そしてその「種」は大学・大学院での研究やフィールドワークによってより芽吹き、花を咲かせていくのだろうと思う。では子どもたちが見つける「種」とは何か。そしてそのための「種」を見つけるために教員ができることは何なのかを考えていきたいと思う。それは「道徳」ではない。あくまでも社会科教育や高校での教科教育、あるいはホームルームでの活動とつながるものとして考えている。

今回は「東北」と「復興」を Subject-matter として考えていく。Subject-matter とは「主題」のことであるが、日本語では「教材」とも訳される言葉である。「東北」と「復興」を子どもたちにとってどのような「主題」として捉えていくべきか、そしてその結果子どもたちの学びにどのような意味があるのかを考えていく。

1. Subject-matter としての「東北」と「復興」

デューイは「思考の開始段階として、現実的な経験的情况が必要だ」としている。ここでの「経験」とは、「何事かをなそうと試みることと、そのお返しとして、その事が人に対して知覚できる程度に何事かを仕返すようにすること」である。¹この点において、被災地である宮城県石巻市や福島県浜通りへの訪問は自らが何かを「知ろう」とすることと、それに対して到来する被災地の光景があり、さらに言えば何事かを「聴こう」とすることと、それに対して「語ってもらうこと」という「経験」が起きている。しかしここでの「経験」は、既存の知識だけで対応しきれないような状況になる「経験」である。東日本大震災の「被災」と「復興」は「今なお進行中の、しかも不完全な状況」²ということができる。「事態が不確かな」「疑わしい」「問題となる」「進行中の」「不完全な状況」に対しては「思考」が生ずる。こうした思考に携わる「経験」を「第二次的経験」ともデューイは呼んでいる。³こうした状況に自分自身が参加したうえで、自分にとっての問題状況として受け止めることで、その問題状況を解決するための「思考」が生じるが、その「思考」とは、「探究 inquiring」の過程、「事態を調べる過程」、「調査の過程」である。その「思考」の展開は次の 5 つの特徴がある。①困惑・混乱・疑惑、②推測による仮説の設定、③焦点化すべきものを絞り込んだ観察や調査など、④そうした観察や調査などに基づく仮説の精緻化、⑤精緻化された仮説の検証作業である。しかし「確実性を前もって保証することはできない」という点において、「すべての思考は危険を伴う」。したがって「思考の結論は、事象によって確認されるまでは、多かれ少なかれ試験的ないし仮説的である」。しかも「被災」と「復興」の「事象によって確認されるまで」の期間

¹ デューイ, 前掲書, p244

² デューイ, p235

³ 岩崎宏志「経験と思考」p272, 『民主主義と教育の再創造』

は非常に長く、私たちはもう生きていないかもしれない（とりわけ放射性物質の汚染については半減期は人間の時間軸とは異なる）。

ここで当事者たちの語りによる「被災」や「復興」に関する「出来事の記憶」は、各生徒が「自分のものにする/領有」することは許されない。であれば、どのようにして「自分にとっての問題状況」として受け止めるのだろうかという疑問が生じる。生徒たちが「自分にとっての問題状況」として受け止めることができる理由として、ここでは2つの可能性が考えられる。1つは語り手と聴き手の間の関係性として、「ケア」の関係が成立している可能性である。もう一つは「当事者にはなり得ない」ということが「自分にとっての問題状況」として立ち現れて来る可能性ということである。

前者の「ケア」の関係についてである。ギリガンは、互いにケアし、ケアされる関係性を前提にするからこそ、「すべての人が他人から応えてもらえ、受け入れられ、取り残されたり傷つけられる者はだれ一人存在しないという理想像」に向けて、「ニーズに目を向け、それに応答する活動」⁴が重視されるとした。だからこそ、ノディングスはケアをする者（ケアの提供者）にとって「専心」と「動機づけの転移」がいかに重要であることを説いた。「専心」とはケアされる者（ケアを提供される者）への開放的な選り好みすることのない受け入れの姿勢、これは先にあげた「ニーズ」を把握するために他者が伝えようとしていることを見聞きし、感じている完全な需要状態である。次に「動機づけの転移」とは「専心」の結果得た他者が伝えるものを受け取って、「他者の目的や課題を助けるように応答したい」と考えるようになる。他者の「ニーズ」に対する動機が、自己に転移するのだ。そして「自分たちが他者を助けるために何ができるのか」を考え始める。そして今度はケアする者に対してケアされる者がそのケアを「専心」によって受け取った時に、相互性のあるケアリングの関係が完成する。⁵こうした関係についてトロントもケアとは「必要を満たすものであり、だからこそ、常に関係的」⁶であることを前提としたりと、その内実として4つの局面を提示している。①関心を向けること（Caring about）/②配慮すること（Caring for）/③ケアを提供すること（Caregiving）/④ケアを受け取ること（Care-receiving）の4つの局面である。これはそれぞれの局面の中で反省や見直しの契機が発生し、③、④の局面からでも①の局面に立ち戻ることもあり得る。⁷これを語り手として語る被災者の方、あるいはその傍に立って支援をしている方たちと、聴き手である高校生の関係に当てはめてみる。先述したように「苦痛の重荷」をともに背負ってほしいという、被害者、あるいは当事者である語り手たちの語りに対して、聴き手の側が「記憶の分有」を通して語りの場をつくり、ともに背負おうとすることは間違いなく「ケア」的な関係である。語り手の側も聴き手の様子に合わせて、話が理解できるように、あるいは学びを得られるように（「教訓」）と語りを変える。「こんな遠くまできて」「わざわざ休みの日に勉強熱心だね」といった語り手の側の言葉や終了後の質問にどこまでも答え続けようとしてくださる語り手の側の姿勢は、聴き手としての高校生たちへの関心や配慮として向けられている。そして実際に自分たちの経験を語ることが学びたい高校生たちに対するケアを提供することとして行われ、高校生たちのリアクション、反応によってケアを受け取ることができているかを確認する。

2022年度に行った現地の方たち（中高生含む）と高校生たちの語り合いという人的交流の場に来ていたある石巻市議会議員さんは次のような言葉をおっしゃっていた。「俺はここに来るまで伝承とか何の意味がある

⁴ キャロル・ギリガン著、川本隆史・山辺恵理子・米典子訳『もうひとつの声で 心理学の理論とケアの倫理』p172-p174

⁵ ネル・ノディングス著、佐藤学監訳『学校におけるケアの挑戦 もう一つの教育を求めて』、ゆみる出版、2016年、p43-p45

⁶ ジョアン・トロント著、岡野八代訳・著『ケアするのは誰か？』白澤社、2021年、p25

⁷ ジョアン・トロント著、前掲書、p27-p29

んだって思った。自分の辛い体験なんて誰にも理解してもらえない。あれからあるのはずっと後悔だけだ。それでも今日若い子ども達が話している姿を見て、伝承にも少しは意味があるんじゃないかって思うようになった。これからの若い世代が未来のことを考えるために」そして、その後に自身の体験を追ったドキュメンタリー番組のDVDを「たまたま録画したものをもらってかばんに入っていたから、よかったらこれ、子どもたちに見せてください」と引率である内田に手渡した（スタディツアー後に埼玉に帰ってから高校生たちと授業中に見た）。これは、語り合っている姿を見た議員さん（被災当事者）が、「誰にも理解してもらえない」と思っていた話を、「若い子ども達が話している姿」からDVDを渡すという形で伝えようとする姿がある。これは語り（≡現地を訪れる高校生たちに対するケア）が確かに受け取ってもらえたという実感を得たからこそ、自身の大切なDVDを託すという次のケアが生まれているのだろう。2024年度に訪れた雄勝花物語共同代表の徳水博志さんは年度末の文集に寄稿してくださったが、その中で次のような言葉を書かれている。「皆さんから送られてきた感想文の中の一つに、「自分事として考えるようになり、8月8日の宮崎県沖地震では、山口県の祖父の家で地震に遭遇したが、身を守る行動が身に付いてきました」という内容がありました。Aさんです。Aさんの感想文からは、地震の体験から自分事に落とし込んで、考え、行動することの大切さを、実感が込められた言葉で書かれていました。私の講和が少しは役に立ってもらえたようで、嬉しく思いました。」ここで徳水さんが書いている「自分事に落とし込んで」ということが、「自分の問題状況」として受け止めることだと考えられるが、その結果徳水さんは生徒たちに向けた語り（≡高校生たちの学びに対するケア）が「少しは役に立ってもらえた」と受け取ってもらえた実感を持っている。

高校生たちは学んできたこと、「聴いた」ことに対して、ツアー後にお世話になった方たちへの手紙やzoomハイブリッド形式での報告会を行う形で、応答をしている。その結果、ケアを受け取ってもらうことをより語り手である当事者の方たちは感じているのではないだろうか。一方で、聴き手である高校生の側はどうかというと、語りを聴くことが語り手にとってのケアとして作用しているならば、どのように聴こうか、ということが語り手への関心や配慮となり、そのうえで「聴く」ことがケアを提供することにつながる。そしてその「聴く」姿勢に対して、思わず多く時間いっぱい語ったり、「来年も来てね」といった言葉で歓迎して送り出したりされることが、自分達の姿勢（≡目の前の語り手に対するケア）を受け取ってもらえた実感することにつながる。この互いに語る-聴くという関係を通して、ケア関係が築かれている。「わたしたちはみな、ケアを提供する者であるだけではなく、わたしたちすべてが、誰でもケアを受け取るひと」⁸になっている。しかし高校生たちが受け取ったものの中には、その場で応答できなかったものも多くある。そもそも「東日本大震災」の中で起こったことを語る中で「誰かに語り伝えて欲しい」「二度と繰り返されてほしくない」などの伝えられる思い、語り手の「ニーズ」はその場で応答しきれものではない。あるいは「復興」の中で今現在起こっている問題については、そもそもその「ニーズ」がどこにあるのかも分からない。そのため「動機づけの転移」があるからこそ「自分の問題状況」として受け止めているし、「専心」はスタディツアー後も続くからこそ、新たに考え始める、あるいは考え続けなければならない。まさに「動機づけの転移を経験すると、人は考え始める。」⁹というノディングスの指摘の通りなのではないだろうか。

もう一つは「当事者にはなり得ない」ということが「自分にとっての問題状況」として立ち現れて来る可能性ということである。この点について、2022年に参加した当時高校三年生の女子生徒がスタディツアー前に次のような言葉を感想の中で書き残していた。

⁸ ジョアン・トロント,前掲書,p31

⁹ ノディングス,前掲書『』 p44

「今私が考えていることは「共感と行動」のことだ。本当はいくら私が同じ気持ちを抱いたって、被災した方の思いというのは理解しえないのだ。それが、説得力や寄りそうことのリアルを生まないで、すごく悔しい。どの社会問題もそうである。当事者ではない自分がどう行動したら、どう変わるか。当事者になにを与えられるのか。すごくもやもやしてしまう。私は大川小学校を実際に見て、話を聞いて、自分になにができるかを考えたしたい。それは石巻にいても、帰ってきてからでもいい。」

語り手から聴くことを通して、語り手の辛い記憶や起こっている出来事の真の意味での「当事者になり得ない」ことは、生徒たちも気付く。それは想像を絶するようなことが起こったことや壮絶な体験を聴く中で気付く。東日本大震災で被災した宮城県東松島市（石巻市の隣町でもある）の中学校で生活綴り方の実践を行っていた教師の制野が担当した 2014 年の当時中三の女子生徒、菜穂は次のように綴っている。

「やはりよく分からない。どれだけ考えても分からない。震災に限らず苦しさを味わった人を助けられないのがやしい。同じ苦しさを知れないのがつらい。きれいごとばかり書いても意味がない。いくら話をきいても、その人の助けにはならない気がする。どれだけ自分ががんばろうと結局、他人事になってしまう。その人自身にはなれないから本当のつらさが分かってあげられない。」¹⁰

埼玉県の高3生の言葉と宮城県の中学3年生の言葉の間には重なる部分も多い。この中3の菜穂の言葉を受けて制野は次のように書いている。

「自分の中にある「非当事者性」に気づくことが、真の共感への「根」になります。このどうしようもない「非当事者性」の自覚こそが、嘘のない仲間への共感につながっていくのです。」¹¹

「自分の中にある「非当事者性」の自覚」は、逆説的に自分が他者にはなり得ない、独自の〈わたし〉が何者であるのかを浮き彫りにする。

2. 共感とは-empathy/sympathy/compassion-

一般に「共感」は、脳のミラーニューロンの働きによるものと神経科学では認識されている。しかし古くから哲学や心理学、教育学などの研究領域からも議論されており、昨今「共感」の研究は学際的にも行われている。先述したノディングスは、ケアリングにおける「専心」の状態（「心を奪われている」という受動的な状態「reception」）から「共感」（自分自身を「相手の状況や立場へと感情移入する」という能動的な状態「投影（projection）」）を分離して考えていたが、最近の心理学の動向を受けて、自身のケア論の中に「共感（=empathy）」を含みこむことを言及している。¹²ノディングスの変化にも影響を与えたスロートは「共感（=empathy）」と「同情（=sympathy）」を分けている。口語的には「共感（=empathy）」＝「相手の痛みを感じること」、「同情（=sympathy）」＝「痛みを感じている相手を気の毒に思うこと」である。「共感=empathy」においては相手が感じている感情が、あたかも相手の痛みが私たちに侵入してくるかのような、非自発的に呼び起こされることを指す。一方で「同情=sympathy」においては、痛みを感じている相手に対して哀れに思ったり気の毒に思ったりし、回復を願うことができる。しかし「同情=sympathy」は相手の痛みを感

¹⁰ 制野俊弘『命と向き合う教室』,ポプラ社,2016年,p160

¹¹ 同上,p161

¹² 河合美枝「ノディングズのケアリング論における「エンパシー」の検討 ―ホフマンとスロートのケア論を手がかりに―」『日本教育学会大会研究発表要項』81号,一般社団法人 日本教育学会,2022年,p13-p14

じること(「共感=empathy」)なしで可能である。¹³そのうえで心理学者ホフマンの研究¹⁴も踏まえて、「真正な共感や成熟した共感(fully developed empathy)においては、共感する側の人間は、自分が相手とは異なる人間である、という感覚を維持している」¹⁵と説明する。

ここでもう一つ、empathyとsympathyと並ぶ言葉、compassionも参照しておきたい。それはempathyやsympathyと並んで「共感」を意味する言葉であり、前者同様に教育学、とりわけ社会科教育において導入されてきた概念であるからである。ヴェイユにとって、「共苦 compassion」とは他者のうちに自らの悲慘を認知することである。自らの悲慘を他者の不幸のうちに認知することである。」¹⁶と言及している。ヴェイユは「不幸」についての思想家であり、それを受け止める認識方法として「注意(attention)」を重視した。「注意(attention)」はその語源から「待ちのぞむ(attendre)」という動詞を語源とし、「目には見えずとも到来するものを願い求める不動の待機こそが、「注意」の核心」¹⁷である。その「注意」の先にあるのは、「あなたの苦しみは何ですか？(Quel est ton tourment?)」と語りかけたときから、彼らを縛る沈黙と不在性を共にしようとしている。「共苦(compassion)」の実践として。それも、自己を失うことなく他者の観点を引き受けるというような、常識的な共感の程度をはるかに凌駕する過剰さにおいて」¹⁸であり、「存在しないものからの沈黙の呼びかけ。それに応答するという受動=受苦の立場を出発点として思考すること」¹⁹である。こうした関係(構造)を捉えるためのヴェイユの「注意」は、池田によれば、「「当事者」の特殊性(つまり、当事者性)を損なうことなく、「当事者」ではない者が、それを理解し「共苦」するために必要とされる、臨床的なアプローチにとって欠かせないものの一つ」と指摘している。²⁰

ハリファックスは「compassion」を「共にいる力」とであると定義づけている。「共感=empathy」との違いについて、語源の古代ギリシア語の「empathia」(「in(内)」と「pathos(情念)」)までさかのぼって、「共感=empathy」が「他者の内面を感じること(feeling into another)」であることに対し、「compassion」は「他者のために感じること(feeling for another)」であると区別している。²¹こうした「compassion」へとつなげる強力な3つの手段が、開かれていること(知ったつもりにならない)、苦しみと共に在ること(ありのままを見届ける)、心を込めて応えること(慈悲に満ちた行為)である。そして他者との間に「適切な境界」を設ける(利己的になることでも、相手を避けることでも、「他者化する」ことでもなく、私たちは苦しんでいるその人自身にはなれないと心に留めておくこと)ことで、共感疲労を防ぐことができると説明している。²²ヴェイユとハリ

¹³ マイケル・スロート著、早川正祐・松田一郎訳『ケアの倫理と共感』勁草書房、2021年、p20-p21

¹⁴ Martin L. Hoffman, *Empathy and Moral Development: Implications for Caring and Justice*, Cambridge: Cambridge University Press, 2000(『共感と道徳性の発達心理学—思いやりと正義とのかかわりで』菊池章夫・二宮克美訳、川島書店、2001年)

¹⁵ マイケル・スロート、前掲書、p23

¹⁶ シモーヌ・ヴェイユ著、富原真弓訳『カイエ4』みすず書房、1992年、p166

¹⁷ 池田華子「厄災に臨む方法としての「注意」——「不幸」の思想家との対話」山名・、前掲書、P184

¹⁸ 池田華子、前掲書、p187

¹⁹ 池田華子、前掲書、p188

²⁰ 池田華子、前掲書、p192

²¹ ジョアン・ハリファックス著、一般社団法人マインドフルリーダーシップインスティテュート監訳、海野桂訳『Compassion 状況にのみこまれずに、本当に必要な変容を導く「共にいる」力』英治出版、2021年、p118

²² ジョアン・ハリファックス、前掲書、p100-p101

ファックスの間では、「compassion」を感じる〈わたし〉の姿勢や在り方が異なっているが、共感から行為（共に苦しむ、あるいは心を込めて行為すること）への何らかのつながりがある点では共通しているだろう。

それでは、この「compassion」という言葉を日本ではどのように捉えられているのであろうか。「同情」「慈悲」「思いやり」のような意味も含む「compassion」を「共感共苦」と訳出したのは、フォルジュの『二十一世紀の子どもたちに アウシュヴィッツをいかに教えるか？』を訳出した高橋武智である。高橋によれば「この語はしばしば「同情」と訳されるが、パッションに「情念」と「受難」の意味があることに着目し」「共感共苦」と訳出した。²³

2001年に開かれた「新しい歴史教科書をつくる会」中学歴史・公民教科書の採択に反対の声を上げる目的で開かれた対話集会『〈コンパッション〉は可能か？——歴史認識と教科書問題を考える対話集会』の対話集会パンフレットの中で、この「compassion」についてさらに言及している。「〈コンパッション〉ということばを集会のタイトルとして使うことについては、外部からだけではなく、実行委員会の内部からもいくつかの批判や意見が寄せられました。「高みに立って憐れむ」ものではないか、大衆性がない等々です。「compassion」ということばには「憐れみ、同情」というニュアンスがあることは事実ですが、フォルジュ氏はこのことばを「他者の苦悩への想像力」という意味で用いています。このような意味を的確にあらわし、いきいきとした説得力をもって伝えることばをいまの日本語に見つけることができないのも、私たちが直面した現実でした。」²⁴この対話集会の中で、高橋哲哉は冒頭でこの集会のタイトルである「〈コンパッション〉は可能か？」という問いについて、それが不可能であるという前提からしか出発できないのではないかとしつつ、この問いが被害者の側から「私たち」に投げかけられているにもかかわらず、当時の日本社会の知識人の強まっている傾向として次のような議論を紹介している。「例えば、私はいま黄さん（黄錦周さん：日本軍によって「慰安婦」にさせられた被害者であるハルモニ）のことばをここで紹介しながら、それを自分たちとしてどう受け止めるかということを申し上げているわけですが、私たちは、被害者の訴えを聞いて、そして日本政府に対して被害者に償いをするように訴えかける責任があるのではないか、という議論をいたしますと、それは本来「代弁」・「代理」することのできない暴力の被害者に自己を一体化して、それを「代弁」できるかのように見せかけて、「正義の暴力」をふるう、そういう知識人の言説なんだ、その正義のロジックによって傷つけられる、問いかけられることによって傷ついてしまう「加害者のほうの悼み」をあなた方は想像できないのか？」という議論があり、それは「加害者がみずからを被害者であるとして加害責任を相対化し、消し去ろうとする動き」だと喝破している。²⁵

当時大学院生としてこの集会に登壇していた須永陽子は同様に「〈コンパッション〉は可能か？」について、様々な本を読んできて、「他者の心をコピーする」ことができないということ、「知ることの困難さ」や「他者と自分の間の断絶の深さ」を感じ、「過去は過去、未来は未来でいこう」というような「未来志向の友好」というスローガンではとても対応できないと発言している。しかし、そのうえで「やはり〈コンパッション〉に可能性があると思っているのは、（中略）、とても困難なことだけれども、他者の苦悩をわかろうとすることが、その断絶をこえて新しい関係をつくり出すということだと思っているからです。負の遺産を克服し、積極的な可能性に転化することはいたいへんなことですが、それは、「あなたたちの問題」ではなく、「私たちの問題」です。」と自身の経

²³ フォルジュ, ジャン＝フランソワ 著, 高橋武智 訳『二十一世紀の子どもたちに、アウシュヴィッツをいかに教えるか？』作品社, 2000 年

²⁴ 対話集会実行委員会編『〈コンパッション〉は可能か？——歴史認識と教科書問題を考える』影書房, 2002 年, p5

²⁵ 対話集会実行委員会編, 前掲書, p18-p19

験をもとに言い切っている。²⁶ここで出てきている高橋哲哉の「本来「代弁」・「代理」することのできない暴力の被害者に自己を同一化して」という部分や須永陽子の「他者の心をコピーする」ことができないということ、「知ることの困難さ」や「他者と自分の間の断絶の深さ」という感覚と重なる。これは宮地尚子が提唱したサバイバルマップ「環状島」の尾根にある対人関係に吹き付ける〈風〉とも重なる。

支援者が自己を被害者に同一化させること、時に支援者が被害者を支配しようとすることもある。そして傍観者から支援者に対して降り注ぐ視線「被害者を扇動している」「被害者を操って自分の社会運動に利用している偽善者にすぎない」といった「偽善者非難」も起こる。²⁷その意味では高橋哲哉の言っている議論は〈風〉にあたるだろう。しかし「環状島は、トラウマ経験のもつ重みや逃れられなさについても描こうとした。人間はある程度経験に縛られて存在するしかないが、それは「経験をしなければ何も分かるはずがない」といった百パーセントの経験主義ではない。環状島は、声の出せない人、抹殺された人を想像しようとする。トラウマについて発話できる人は、発話できているのだからたいした傷を負っていない、ということが言いたいのではない。カムアウトできるくらいならたいした差別ではないと言いたいのもない。声を出さない当事者はどこにいるかわからない。見えないもの、知らないことに想像を働かせるとき、そこには補助線が必要になる。さもなければ想像自体が、見えないものに対する暴力となりうる。〈内海〉を想像するためには、声の出せる人や、その証言から補助線をひくことができる。そういう意味では、すべての証言は代弁で(も)ある。つまり、証言は証言そのものとして尊重され深く受けとめられるべきであるとともに、より内側にいる犠牲者の代弁としても理解され深く受けとめられるべきである。」²⁸とあるように「深く受け止められるべき」という姿勢は変わらない。

以上「共感」について empathy、sympathy、compassion という言葉から考えてきた。この3つの言葉で重なっているのは自己と他者の違いをまず前提にしているということだ。自分と相手は同一ではないからこそ「共感」することができるし、「共感」することによって相手と自分の違いがますます浮き彫りになる。そもそも経験した者にしか分からない、当事者にしか分からないということは出発点である。だからこそ「共感」することができるし、「共感」を原動力にさらなる「共感」へと広げていくことができる。先述した埼玉県(自由の森学園)の高校3年生の生徒も宮城県の中学3年生の生徒も、「共感」ということを軸に「被災した方の思いというのは理解しえない。」「同じ苦しさを知れないのがつらい。」という感覚になる。だからこそ「いくら話をきいても、その人の助けにはならない気がする。どれだけ自分がんばろうと結局、他人事になってしまう。その人自身にはなれないから本当のつらさが分かってあげられない。」という気づきや、「私は大川小学校を実際に見て、話を聞いて、自分になにができるかを考えだしたい。それは石巻にいても、帰ってきてからでもいい。」という思いにつながる。この二人の違いは被災地からの距離の違いかもしれない。しかし制野が「真の共感につながる」と背中を押したように生徒の「非当事者性への気づき」そしてそのことへの「くやしさを認めて、それでも向き合い続ける姿勢を支え続けることで、「考えだしたい」という考え続ける生徒の姿勢にもつながっているのではないだろうか。なぜならば須永が言ったように他者と自己との違い(当事者/非当事者の違い)の自覚を出発点に下「「あなたたちの問題」ではなく、「私たちの問題」という引き受け方が存在するからだ²⁹。

²⁶ 対話集会実行委員会編、前掲書、p75

²⁷ 宮地尚子、前掲書、p30-p31

²⁸ 宮地尚子、前掲書、p214

²⁹ この「私たちの問題」という引き受け方について、「当事者」という観点から以下3つの考え方も紹介しておく。諏訪清二は災害多発国日本においては「被災者」、「被災地」に対して被災地の外に住んでいる人たちも未だ災害にあっていないという観点から、「未災地」「未災者」という言葉で呼ぶことを提言している。(諏訪「学校で災害を語り継ぐことー〈戸惑い〉と向き合う教育の可能性」山名・矢

2022 年度の石巻スタディツアーに参加した別の生徒は次のように感想を書いていた。

「悲しみを“共有”することはできないけれど、緩やかに繋がりながら共に抱えていくことができるんじゃないかと思う。私が石巻に行って、教えてもらったことは向き合い続けること。変わることもない、失うことの悲しみと変わり続ける(復興していく)街の景色。どんどんかけ離れていくものを抱え続ける、見続ける。そうすることしかできない。それは強さなのかもしれないし、優しさなのかもしれないし、そんな綺麗な言葉では表わすことができないこともたくさんあったと思う。そういう意味でのリアルを知ることができた。そしてもうひとつ心に留めておきたいのは、石巻の人々が私たちに語ってくれたという事実。知ろう、と外から来た人を受け入れ、思いを伝えてくれた。決して簡単なことではないはずで、語ってくれたことの意味を私たちは考え続けなくてはいけないと思う。…(中略)…3 日間を経て今の私にできること。正直問われると、考え込んでしまう。行ってみないと分からなかったこと、行ってみても分からなかったこと、どちらもあった。「どうしようもできない」ことにもたくさん触れた。まずその無力感や矛盾に向き合う必要があると思う。その先で自分にできること、したいことは何か。スタディツアーから帰ってきて今からがスタートだと思う。できることが思い浮かばないのではない、なんというか、ひとつひとつの行動に自分自身で納得するまでが苦しい。石巻のことを忘れないでいること。終わらない復興に関わり続ける。Rera さんは復興支援の予算は減っていくし、現地に来るボランティアの数も減っていくとおっしゃっていた。自分が感じたことを自分の言葉で語ること。語り部をして下さった方は息子さんを津波で亡くしていて、「母親としてしか語ることができない」と言っていた。人はみんな、自分としてでしか語ることができないと思う。だからこそ、自分の言葉を大切にしたい。語ることが全てではなくて。苦しんでいる人に何も言わずにただ寄り添うことが今の私にできるだろうか。」

3. 主体の問題としての subject-matter

教材は文字通り「主体(subject)」の「問題(matter)」でなければならない。³⁰「探究のテーマ」である教材は、子どもとともにつくられるものであり、教師も教材をつくることにおいて探究者となる。教材は「学びの場」をどうするのかという問題である。こうした「学びの場」は「探究と創造、知的発見のよろこびが、たんに教員のみによってではなく、教員と生徒によって、ともに経験される」³¹ものでもあるだろう。ただし教育者(=教師)の方は教材に熟知している分、教材に対する生徒の態度や反応、そして現在の能力や教材との作用と反作用(相互作用)に専心しなければならない。³²学習者にとっては「経験の中で教材が発達する過程」が重視される。そ

野,前掲書,p226) 石戸諭は非当事者ではない立場ではなく「歴史の当事者」という立場からの語りを提案する。「未来に向けて何かをしたいと思うとき、狭い意味での「当事者」か否かという線引きは無効になる」(石戸諭『リスクと生きる、死者と生きる』亜紀書房,2017 年) 宮地尚子は「発話そのものに敬意を払うとともに、それでも語られずにいること、表現されえない何かが存在することを想像してみたい。そういった受け止め方や聞き方、たたずまい方を体得していきたい。このことさえ確認できれば、もはや当事者であるかそうでないかの区別など、どうでもいいことと言えるのかもしれない。さらに引き延ばすならば、当事者からいちばん遠い人を想像すること、いちばん遠い人を悼み、愛し、つながろうとすることが、逆説的に〈内海〉にいちばん近く深く寄り添うことになるのかもしれない。」と結んでいる。(宮地,前掲書,p214-p215)

³⁰ 山上裕子「14 章 教材の本質」p281

³¹ 里見実「見えないものを見る力 社会を読む」『ひと』太郎次郎社,1972 年

³² デューイ,前掲書,p289

れは教育者が教材に熟知している場合に成就された知識によって正確に定義し、論理的に相互に関係づけられることができるが、逆に学習者である子どもたち（＝初学者）にとっては経験が組織化されておらず、流動的で偏っているものを個人的な仕事として結合されていく。この「過程」を山上は「いかに為すべきかという知識から、経験以外の情報を得て、それまでの知識に意味をもたらし、知識は拡大され、論理的に組織化されていく。学習者自身の経験の中に教科内容は組み込まれ、経験の意味として組織化されていく」³³と表現した。一方で「教材」には社会的状況下でつくられているという意味で、社会的なものとしての側面もある。「社会的責任を認める教育課程は、共同生活の諸問題に関係のある問題を含み、社会的洞察力や社会的関心を発達させるのに適した観察や情報が行われるような状況を提供しなければならない」³⁴とデューイは指摘している。

以上みてきたように、「東北と復興」の学びにおいては、「東北」と「復興」をデューイの言っている「教材＝subject-matter」としている。「東北」については、中央と地方の関係という歴史や構造的なこと、そして東日本大震災を扱っている。地震予知研究者の今村明恒が1929年創刊の雑誌『地震』の発刊の辞に寄せたように、地震が「自然現象」であり、災害が「人間の文化を前提」としている「人為的現象」³⁵であるならば、「東北」と呼ばれる場所がどこにあって、どのような歴史をたどっていて、どのような構造があるのか、どのような暮らしがあるのかを知識的に知ること、実際に被災地を訪れるスタディツアーでの生徒たちの経験を意味づけると同時に、一方で新たに問いも生まれる。「復興」についても同様に、実際に被災地で何が起きているのかを語りや景色を見ることで経験することで、さらに新たな問いや考えに直面する。東日本大震災の被災の伝承に関わる震災遺構や伝えられ方も通して、子どもたちは新しい発見をする。1956年広島を訪れた、哲学者のギュンター・アンダースは第二次世界大戦後の広島の町を見て、「復興は破壊の破壊である」と言った。これは「復興」によって「破壊」が破壊されたということであり、したがってアンダースは「破壊の極致」とまで言い切っている。「実際、わたしには、ここで起こったことを思い出させてくれるものは、なにひとつ見当たらない。目に見えるもの、すなわち新しく建った家、それは、ちょうど新聞や日常生活の話題がそうするように、過去にあったことを抹殺してしまう。すべてのものが、“時間と無関係”である、つまり、はじめからそこにそうして立っているかのような顔をしている。現在あるものは、“前からずっとそうであった”ような仮面をかぶっている。そうして、この仮面をかぶった現在が、ほんものの過去を覆いかくしてしまう。歴史は、過去の方に改ざんされている。しかも（復興も、けっきょくは歴史なのだから）歴史自身の手によって。歴史——それは、歴史の自己かいざんの歴史である。」³⁶アンダースの考えには広島原爆被害（爆心地やその結果の町の光景）をそのまま遺構として残すことによって人類に警告をもたらすことを目的としていた。だからこそ「復興」によって「破壊の破壊」がなされたと考えた。もちろんこれは広島で暮らしている人たちの事情とは別の視点からだろう。合わせてもう一つ、震災後かさ上げされた陸前高田市での復興工事、およびその過程で出会った人をモデルに瀬尾夏美が書いた『二重のまち』という作品がある。この『二重のまち』は「広島物語ですね？」と尋ねられることも多いという。瀬尾が広島を訪れた際のあるおじいさんとの会話は震災からの「復興」と戦争からの「復興」と重なる部分が多く象徴的である。「おじいさんは、『わしが見て欲しいものはひとつなんよ』と言って、私を追悼平和祈念館の地下まで連れていった。そして、『これじゃ』と指さしたのは、背の高い地層の標本だった。『平和公園はきれいでええですねえなんて言われるけどな、ここにはまちがあったんよ』。おじいさんが『わかるか？』という風にこちらを見てくるので、私は目の前の標本をじっと見てみるしかない。『この公園はな、1メートルくらい嵩上げしてあるん

³³ 山上裕子、前掲書、p282

³⁴ デューイ、前掲書、p303

³⁵ 今村明恒「発刊の辞」震災予防評議会編『地震』第1巻第1号、p1-p3

³⁶ ギュンター・アンダース著、篠原正暎訳『橋の上の男』朝日新聞社、1960年、p79

よ。ほら、この上までは後から被せた土で、こっちがもとの地面。だから、この間に挟まっているのは焼かれた日用品じゃ。みんなそのまま埋めてしまったんじゃない。彼は愛おしそうにその部分を指でなぞりながら、『何にもなかったと思われるのが一番悲しい』とつぶやいた。ここにはまちがあって暮らしがあって、色も音もあって、しかもそれは辛い記憶だけではなかったのだから。』³⁷

2022 年度、講座を開いた最初の年に訪れたある生徒は次のように石巻市スタディツアーの感想を綴った。

私たちは九月十七日～九月十九日まで、フィールドワークで石巻に行った。私が石巻に行き、最初に驚いたのは、海が高台に登らないと見えないということ。高台に登るまで本当に海が近くにあるのか分からなかった。街は何もかもが新しく、古い建物といえば震災遺構の建物ぐらいだった。昔からあった街ではなく、新しい街と言う方がしっくりくる。本当にここまで津波が来たのだなと実感した。

ずっと心に残っていることは、今も現地に住んでいる方に、「私は震災遺構(門脇小学校)をみたくない」と言われた事だ。現地に住んでいる人はほぼ毎日見るだろうし、それを見て辛いと思うなら「撤去すべきなのかな」という気持ちもある。しかし、私は震災遺構がないと「本当に被害があったの?」と思ってしまおう。写真だけでも理解できるが、実物が無いと実感が湧かない。震災遺構を残したい人と残したくない人、現地の方も色々な意見があるだろう。この問題は「復興」を考える上で重大であると思った。大川小学校は在学していた生徒が残して欲しいという事で震災遺構になった。この場合、住民の反対はあったのだろうか。反対派は言いづらいだろうと思う。この疑問が私の中でずっと残っている。

「復興」が進んだ町、建物や道路が新しくなり、「新しい街」となった石巻市を訪れ、「震災遺構」がなぜ残ったのかを考える。「震災遺構」は誰のためのものなのか。この生徒の感想にはアンダースの論や瀬尾と広島のおじさんとの邂逅とが重なる部分がある。一方で「震災遺構」が誰のものなのか、現地に住む人たちの生活にとってどのような意味があるのか、という観点は誰のための「復興」かという視点につながる。それは震災を伝承することも含めた「復興」なのかどうかという点において大事な視点であるが、一方で「反対派は言いづらいだろうな」という声を上げられない人への気遣いにも似た想像力がこの文章からは感じられる。「復興」と「震災遺構」をめぐる問いは多くの生徒の考えの中から出て来る。「復興」とはどうあるべきか、「震災遺構」がなければ学ぶことが出来なかったかもしれない自分と一方でそれが現地の人たちの暮らしにとってどうなのか。その問いに当事者不在でもなく当事者のみに委任するのでもなく、〈わたし〉たちの問いとして出て来る。

この講座のタイトルには「東北と復興」を探究するテーマとして掲げていると同時に、「東北と復興」と〈わたし〉という言葉が隠れている。それぞれの探究のテーマとしての subject-matter に〈わたし〉がどのように向き合っていくのかということだ。そこでは教員自身も少しだけ生徒よりも「東北と復興」について詳しい立場としてかわるが、答えを知っているわけではない分、生徒とともに学習者としてかわっている。³⁸一方で少しだけ詳しい分の余裕を、事前学習としての子どもたちの「東北と復興」を探究する姿勢や態度について向け、「中間点」にとどまれるような支えや声かけ、時に一時避難や経験に意味づけをしていく存在としてかわることになる。そして「東北と復興」のスタディツアーでの経験を通して、埼玉から訪れた子どもたちや教員である〈わたし〉たちは新たに問い返されるのだ。その問いを出発点に事後学習も深めていくことになる。

³⁷ 瀬尾夏美『二重のまち/交代地のうた』書肆侃侃房,p242-p243

³⁸ 継続して参加する生徒の中には特定の分野、例えば「東北と復興」にかかわる行政や法、動物のことなどについて教員よりも詳しい生徒もいる。

4.「東北」と「復興」に関する生徒たちの気づき、問い

・一番感じた事は、「復興は終わっていない」と思った。どのように、後世に伝えていくのか、どのように町を作っていくのか、どのように事実を知るのか、どうしたら知れるのか、今も震災の影響で苦しんでいる人、悩みがある人、たくさんいる事を知る事ができた。一見、「きれいな町だな」とか、復興してあとかたもねーとか思うけど、その裏では、命がたくさん消えてしまった場所であり、忘れてはいけない場所でもある、と感じた。門脇、大川それぞれの小学校に行き、ここまで差があるのかと思った。命が助かって、都合のいい門脇は整備され、大川では、市にとって、消したい存在であるから、雨ざらしで、中にも入れない。どちらも震災を伝承していくうえで大切な場所なのに、差があるのはおかしいし、その事に悲しんでいる人がいる事を忘れてはならないし、まだ、復興していないと、感じた。

・震災から11年経った石巻の復興には、問題が複雑に絡まっている印象を受ける。女川町の2015年の住民意識調査では、復興は順調に進んでいると思う人は72%、同時に、復興から取り残されている人が多いと思う人も75%だった。命が助かった学校と助からなかった学校、語り部さんの語り方には違いがあった。大川小学校の語り部さんは、隣にできた記念館(伝承館?)を「中途半端」と言っていた。語り部さんの主観を通した評価だとは感じるから受け取り方に迷うけれど、それでも市や県が経験を選び好んで伝承していくことはあってはいけないと思う。なぜ助かったのか、もなぜ助からなかったのかも、どちらも同じくらい重要だと私は思う。海を見えなくしてしまった防潮堤。誰を、何を守る防潮堤なのだろう。空が広く、風の気持ち良い石巻、家も道も全部新しくて整然としていた。かつて海の周りに街が広がっていた。海と一緒に、人と人が繋がりながら暮らしていた場所だったはずだ。でも今、ここでコミュニケーションが圧倒的に減ってしまったのだろうということは、震災以前を知らなくても分かった。街にあったものごとを過去にしてしまった震災が純粹に悔しい。

・次にこの復興という出来事に、被災者ではない自分が、どう向き合うべきなのか。この問題に、年明けから考えるようになった。でも東北と関東は距離もあるし、簡単につながる事ができないし、実際にこの学校で、被災地に行った人は、少数派だと思う。最初は、つながりがないと、復興に向き合う事は出来ないと思っていた。でも、つながる事だけが全てではないんじゃないか。そう思うようになってきた。スタディツアーで沢山の現地の人の声を聞いたが、全員に共通して言えた事は、僕達に知って、考えて欲しい。という願いだった。それを受け取った僕達が、今度は、この学校みんなに、現地の声を、届けて、知ってほしいと、願い、伝える側に回るべきなのでは、と考えた。この間接的ではあるが、誰かに伝えるという事は、ある意味、復興の手助けになると思う。被災者の願いを拡散して、同じ事が起こった時、二度と同じ思いをしないように、考えていく事が、復興なのではないか。

・実際に足を運んで見たものは、映像で見る時とは違う迫力があつたし肌で感じれるものがあつた。風が通りひとつひとつ目に映った光景から、子ども達が笑いかけ走る姿がどことなく私の目には映つたし、想像でしかない光景と今日の前にしている光景が行ったり来たりまた重なったりしていた。大川小学校では手元に映る写真と話してくれているその温度がよりそれを鮮明にしてくれていると感じている。ただ同時に、私にはこれを飲み込みきれないと思うし想像し切ることにはできないのだと痛感した。それでも、足を運んだことや展示物を目にしたことと当時の一瞬一瞬を切り取るように様々なことが目に映った。いろんな展示をみて勿論当時の情報として語られるものがある中で、感情や人が表現する言葉としての発信を、割と多く感じたことが少し驚きでもあった。ある意味小さな声として映るだろう教員、保護者、親、子どもまでもの多くの言葉が私の中に入ってきて、ただひたすらに噛み締めていたし震災というものが人にとってどんなものとして映っていたか、その目を借りるような心地だった。

・午後は雄勝の方へ移動した。おじま漁港ではホタテの養殖を船に乗りながら見せていただいた。最近、海水温の上昇により、牡蠣やホタテの稚貝が死んでしまったり、そもそも種が付きにくい状態になっている。その

為、ホタテの種を北海道から買ったり、牡蠣の種を広島に売ったりしているらしい。地球温暖化の影響が出てるとひしひしと感じた。

・スタディツアーに行く前、私の中で「東北」は震災で大きな被害を受けた地域でした。「復興」という曖昧で、人によって捉え方が異なってしまう言葉には触れないように過ごしていました。被災者の人のために、震災のことをなるべく思い出さないで過ごせるように、そんな偏見から、東日本大震災について深く学んできませんでした。

東北と復興の授業を通して、東日本大震災の壮大さや沢山の悲惨な話を耳にしました。色々な感情や覚悟を持って訪れた東北、宮城県石巻市は、事前学習の時に目にしていた瓦礫だらけの道路や、どんよりとした空気など感じられないほどに、綺麗で静かな街でした。どの施設に行っても置いてある、震災前の石巻市の風景から変化しすぎていて、とてつもない寂しさを感じました。

山もあり川もあり海もある。とっても豊かな街が一瞬にしてヘドロまみれの水に覆われてしまった事実から目を逸らすのではなく、様々な形で私たちに伝えようとしてくれていました。

復興という私が今まで触れてこなかった言葉は、被災した方々にとっては触れてほしいものだったのです。触れて、感じて、考えて忘れないでほしい。四日間で沢山の方に言われた言葉です。

・私がこの1年でこの講座から学んだことは復興のゴールと、そこに至るまでの道のりの長さや過酷さが尋常ではないことです。

まず私が学んだことを活かして定義した復興のゴールとは「被災した地域の機能を回復させ、被災地というイメージをその地域から払拭させ『そこに人や動物を呼び戻す』こと」ということです。なぜこういう風に定義づけたかというと、東日本大震災から今年の3月11日で13年が経ちますが、まだ一般市民が立ち入れない、立ち入っても時間制限がある地域があることです。また、放射能汚染のイメージがやっと福島から払拭しはじめたのにALPS処理水の海洋放出でまたそのイメージがでてそのイメージをまた払拭しなければならなくなったからです。また13年経とうとしているのに復興のゴールがまだだということをふまえると、ゴールへの道のりの長さや過酷さが尋常ではないことが分かります。

・復興に終わりがあるのだろうか、という問いを抱えながらこの講座を受講しました。東北の歴史を学ぶことから始まり、スタディツアーで実際に現地を訪れ、自分自身のものの見方が変わっていくのを感じました。

まず始めに私が考えたのは、「当事者でない私たちがどのようにして当事者と関わっていけばいいのか」ということです。私たちが震災について尋ねるのは無責任ではないか。苦しい出来事を思い出させてしまうのではないか。色んなことを考えてしまい、知りたいことも聞けない状態でした。そんな中で、東北を訪れ、気付かされたことが沢山あります。

私たちが訪れた石巻市は、震災から12年が経過し、すごく綺麗な街になっていました。「復興」と聞き、イメージするのは、瓦礫がなくなり、建物ができ、人々が日常を送れるようになることだと思います。しかし、石巻市の街並みは、震災があったことを感じさせない、石巻市に歴史があることも感じる事が難しいものでした。綺麗で同じ建物が立ち並ぶ、静かな街を目の前にし、とてつもない喪失感を感じました。

事前学習や遺族の方のお話を聞き、何度も想像しました。自分の大切な人を震災で失ってしまう苦しみ。私には、どうしても想像しきれないものでした。

震災当時、混乱がひどく、報道などでしか被災地の情報が得られない状況だったと思います。しかし、広く報道されたのは、「人」についてだけなのです。何人の方が行方不明で、何人の方が亡くなった。その背景には、報道されず、静かに苦しんでいた人たちがいたことを知りました。我が子のように丹精込めて作り上げてきた野菜が収穫できなくなった農家さん。愛情を込めて育ててきた養殖魚が死んでしまった漁師さん。震災や原子力発電所事故は、人々だけでなく、多くの大切なものを奪いました。

・私は昨年、この文集で「復興」とは何か疑問に感じると書いた記憶がある。その問いの答えを知るため、昨年のスタディツアーでは何も出来なかったことも相まって今年度もこの講座を受講することを決めた。では一年間、「復興」とは何なのか問い続けてきてどうだったのか書いていこうと思う。

まず最初に答えを見つけることができたのか、単刀直入に行ってしまうと答えは「NO」だ。(中略)

今年度は現地でしっかり質問したり、現地のことを知ろう。そうすれば答えは分かるはずだと考えていた。今年度、二度目の現地を訪れてひたすらに質問した。年代、肩書き、問わず聞きまくりノートに書き記した。そしてスタディツアー終了後にパッとノートを見て、「全員言ってること違うし、余計に分からなくなったわ。」と思ってしまった。たかが一つの言葉、されど一つの言葉で、普段テレビやインターネットで普通に使われているこの言葉はただのハリボテであって、その奥には数えきれないほどの意味、捉え方があった。現地で暮らしている人でさえ意味が違うし中には「復興」という言葉を一度も使ったことがない人もいた。それなのに、自分含め我々は「復興」という言葉を使い知った気になっていたと現地の方の声を聞いて考えた。そして、現地の方の声で一つ共通していることがあった。それは、「暮らし」に関することだ。いくつか抜粋すると、「社会的弱者が暮らしやすい街創り。」「安心して暮らせること」という声を聞くことが出来た。このように決してハード面の復旧が済んだからと言えないその人自身の心のこと、暮らしのことが「復興」という言葉にはあり、それらは表面上では見えてこないことだ。実際に石巻の市街地は震災の爪痕が分からないほど綺麗になっているし、一昨年と去年の間で変化があったとすれば「いしのまき元気いちば」のロータリーが完成したくらいだ。これで「復興」は終わったと感じる人もいるだろう。でも現地の「暮らし」、被災された方の中からは震災当時から何も変わっていないかもしれない。変わることができていないのかも知れない。これらの人間自身の「復興」は前述したように可視化されにくく、お金でどうこうなる話でもない。このような内面的な「復興」は過去の災害において達成されていないのではないだろうか。この「復興」にはタイムリミットがある。「命」だ。震災から立ち上がれないまま、その方は亡くなり、綺麗になった街だけが残る。そして表面上の「復興」が完成してきたのかもしれない。今、私がいる関東も一〇一年前には大地震が発生しており、それによって都内の道路は再整備され現在の大通りが誕生している。これはハード面で表面上のものだ。実際に被災者は亡くなられていて、内面的なものは分からず、忘れ去られてしまったのではないのだろうか。東日本大震災でも福島県では震災関連死が多く、中には内面的な「復興」が果たされぬまま亡くなった方もいるのではないかと考える。私達はそんな人達に向き合っていかなければならない。この言葉で終わるのはよくない。たかが関東の高校生が向き合うことはできないし、何様だ状態だ。この気付きもとっくに分かっている人は多いはずだ。これで終わりにしては知った気になった状態だ。そうならないために、私はまだ「復興」の答えを見つけていない。一歩目にちょっと踏み入れられたくらいである。これからもこの問いで悩み続けたいと思う一年間だった。

・また現地の方から話を聞いたことで、「復興」への考え方が少し変わりました。今までは、震災前のにぎわいを取り戻すことや滞ってしまった文化や伝統を再生させる、以前のような生活が送れるようにすることが復興だと考えていました。しかし3日目に阿部さんが「復興は新しい時代に合わせてつくること」とおっしゃっていて驚きました。そこで、必ずしも元に戻すことが正解とは限らないと気づきました。防潮堤をつくることも住民全員が賛成している訳ではないということを初めて知りました。確かに海の近くは人が住めなくなったのだから作る意味がないと言われればないとも言えるし、これまで海が見えていたのが見えなくなる寂しさにも納得しました。防潮堤について考え方が一人一人違うように、復興についてもそれぞれの考え方があるのかなと思います。だから復興のゴールは一人一人が持っているもので、正解はないのかもしれない考えるようになりました。私が石巻に着いて最初に思ったことは何もなくてなんかガランとしてるなということでした。でもローズガーデンファクトリーさん、鮎川捕鯨さんなどたくさんの方達に出会って、石巻の方の温かさを感じました。また自分が住む町に愛情を持っている人って素敵だなと思いました。

・ハザードエリア、いわゆる非可住エリアで、私は沖縄県の、基地問題に直面した時のような住民性があると感じた。石巻市の門脇町は、高盛道路から海岸側の土地はハザードエリアに指定されていた。津波被害による悲劇を繰り返さないように、防災の観点で人が住めないようになっている。今では大規模な公園化されていて、伝承館まである。そこでは国によるハザードエリア指定が決定した後に、当時の門脇町の住民による反対運動があったと聞いた。私の中でその門脇町の反対運動が、沖縄県の辺野古基地前座り込み運動と重なった。内容は全くもって違うものだが、双方とも自分の地域を守るための、国や政府に対する社会運動。このような反対運動はもちろん、門脇町以外でも起きている。私も自分が生まれ育った町が、自分や地域の納得や理解を得ずに変わっていく姿は見たくないから当事者であれば反対するだろう。でも忘れたくないのは国や政府は国民を守るために、このような決定にしたことだ。それは一方的な不条理劇ではなく、国の「国民を守る」義務を果たした結果になる。私は、この地域の声と国の判断・決定の「差」が復興での難点の大きな一つだと感じた。

この難点の解消には住民と政府による歩み寄りの精神がカギになってくる。実際に、雄勝ローズファクトリーガーデンの徳水さんは、「住民の声が届き、要らない防潮堤の削減に成功した地域がある」と言っていた。これが住民と政府による歩み寄りでできた共同性だと思った。けれどこの結果も、住民の納得いかない反発心から生まれた反対運動によるものだ。最善の復興とは、根本的に反発心を起こさせないものだと考える。だからこそ復興に必要とするのは、しっかりとしたグランドルールとローカルルールになる。国民を守る最低限度の基準を守りながら、住民の納得を得る形にする。そのようなグランドルールを作るのには政府と国民による歩み寄りの精神で、しっかり議論し吟味しなければならない。この共同ができなければ、復興は一方的な不条理劇になりかねない。グランドルールの上で独自性を持ったローカルルールができたら最善な復興に繋がる。私は、何を守るか分からなく海が見えないほど高い防潮堤を見て、セメント会社が儲かる仕組みを聞いて、地域と政府の共同性を思った。復興の大きな難点を解消するのは共同性にあるかもしれない。

・考えたこと、三つ目は「復興について」。ツアーの中で出会った多くの方々はそれぞれがそれぞれの辛い思いをされたと思うけど、私たちにそんな思いも含め、自分がしているお仕事のことだったり、地元の魅力をたくさんお話してくれた。そして、一人一人に復興の形があった。復興という言葉が持つ意味は一人一人違った。皆さんのお話を聞いていく中で私は思った、「私が思う復興って何だろう？」復興って何を指すんだろう。どこまでいったら復興できたってことになるんだろう。私は復興にゴールなんてないと思った。復興っていろいろなことを指すと思う。震災で壊されてしまった土地に対してだけではなく、傷ついた一人一人の方の心まで。土地もそれぞれの時代に合った形で変わっていくし、傷ついた心と向き合うことは先が見えない大変なことだと思う。それでも、みんなで助け合いながら生きていくこと、未来に繋げていくことが大切だと思った。

・このスタディーツアーで最初に肌で感じて知った事実は、門脇小学校と大川小学校の対比から得ました。1番初めに、門脇小学校へ向かい、数の裏にはちゃんと人がいるということや、隣り合うクラスを見比べて、震災はいつ起こるか分からないことを学び、その後実際の逃げ道等を見学させていただきました。この時点でも、震災の傷跡に、心を抉られました。今後も震災遺構として残せるようにと、綺麗に修繕されていたこともあり、どこかぼんやりとした震災の全貌を感じて、その日は眠りにつきました。次の日、見たのは、少しは維持されていても、あの日あの時から時間が止まったように、ただそこに佇む震災遺構。犠牲となったお子さん方の親御さんが何とか残した大川小学校は石巻にある小学校の内、唯一子供の犠牲者がうまれてしまった学校で、うまれてしまった根本には、県ひいては国の、学校における防災対策不足であり、第二、第三避難場所を設定していなかったことが原因と言われていることもあり、政府が震災遺構として残したがっていないことが、門脇小学校と比べてみるとありありと浮かぶ場所でした。別の場所でお話を伺ったときも、市内の学校から語ってくれと呼ばれたことがないとおっしゃっていた方もいて、政治の複雑な裏を垣間見た気持ちになりました。また、少し逸れてしまっていますが、わすれん（せんだいメディアテーク）のスペースが、少し狭いな、と感じたことも、みんなも感じていた

ことだったのか、と思いました。それから、原発への道の復旧が早かったというお話も、至極当然な判断なのですが、本当に、何とも言えない気持ちになりました。また、門脇小学校から見た、草原。もう2度と人が住めない土地という言葉から、失ったものの重さをとても感じ、言葉に詰まりました。

今回のスタディツアーで、実際に現地に足を運び、その当時の話を当時いらっしゃった方に聞くということの大切さを学びましたが、特にそのことを感じたのは大川小学校と、幼稚園バスの事故現場で、「死者が出てから気づき、動く」という、人間社会の複雑さ(それでは遅いと強く思うが、そうならないと気づけないこともあるのかも知れないと考えている)と、こういった震災遺構こそ、未来で2度と起こらないようにと語り継いでいくために、残していくべきなのではないか、と考えました。ただ、私としては、残しはしたいけれど、門脇小学校の様な残し方ではなく、先ほど綴ったような、あの地域全体で「時が止まったような」残し方ができたら良いのではないかと思います。思うに、門脇小学校は、確かに保存という意味では良い保存の仕方であると思うのですが、震災遺構としての悲惨さを伝えるという意味では、かの保存の仕方では、悲惨さが薄れているような気がするのです。ただ、これに関しては犠牲者の違いからの私の心の持ちようや、感性の問題なので、あくまで私的には、ということなのですが、大川小学校は逆に、かのような門脇小学校のようにお金をかけられていないからこそ、被災の爪痕が大きく残って今まで届けられたように、思いました。

・門脇小学校では、いままではここは変わらないな—と思うくらいで見てたけど、今回はじっくり見て回ることができて、火災で燃えた教室に消火器が真っ黒になって転がっていたり、机の展示の周りに水筒があったり、傘の骨組みが落ちてたり、細かい部分で新しい発見をすることができたと思う。燃えた当時のまま残ってるって、本当にあった災害なんだよなって改めて実感できるからすごくいい施設だなと思う。大まかな展示は過去に見たから、今回は細かい部分を見たいなと思っていて、ちゃんと見れて良かったです。門脇小に住み着いてるらしい猫ちゃんのことも気になったり、また行きたいな。

3.11 メモリアルネットワークでは、大川小のけんとかんのジャンパーをおそらく初めて見て、すごくきれいな状態で残されていて、こういう展示を見るとどこでも思うけど遺族の方、そして周りに関わっている人たちの、大切にしようという心がすごく伝わってくるなと。同情とか、悲しみだけでなく、現地の人たちの忘れないで伝えつないでいこうという気持ちが伝わってくるな—と思いました。

二日目は大川小学校。大川小学校は昨年行ったときに撮った、向日葵が生えている写真がお気に入り、何回も見返したりして。ここが一番、どこよりも寂しいなと思うところだけれど、遺族の人たちの思いが一番伝わってくるところだなと思う。話を聞きたびにどうすればよかったのか、なにが適切だったのか明確だけれど、教師の気持ちも生徒の気持ちも、ほかの人の気持ちも全部わかる気がして一番いろいろ考えてしまう場所。がれきに埋もれた遺体を腐敗臭で見つけたって話がすごくしんどかった。「親として」娘の最期を知りたくて伝承の会に入ったというお話は、深い悲しみと親心を感じてつらくなりました。実際に土砂に飲み込まれたここに自分が立って考えていくことって重要だなと改めて思います。

・今までずっと復興はもともとあるものを形を変えずにそのまま元通りにすることだと思っていて、それは海でも山でも同じだと思っていた。例えば海だったらたくさんの種類の魚や生き物がいて自分たち人間にとって厄介だったらそれを駆除する。でもそれは自分たちにはいらなくて厄介な生き物でも海の世界では生態系を守っている。その生き物がいないだけで生態系は崩れるという話を私は前に聞いたことがあって、それなら山だって鹿が増えているから駆除するとかしないでそのままにすればいいのになってずっと考えていたけれど鹿が増えるとヒルが増えたり、良い山をつくるには木を手入れしたり広葉樹を植えたりすることで、動物が住みやすい山になったり、土砂災害が起きにくくなったり、山からの養分が地表を通過して牡蠣が育ったり、哺乳類や鳥にもいい影響を与えることだって出来たりする山を変えるにもひとつの選択に目の前の1つの問題だけではなくて多方面から見ることで50年先、100年先の未来が変わっていくということが分かったし、私は自分だけの事ではなくて

他の生き物のことも考えていたつもりだったけど話を聞いてまだ自分は綺麗な海や山のありかたを分かっていたし結局は自分のことしか考えていない一人だっていうことに気づいた。

・特に印象的だったのが門脇小と大川小の違い。同じ震災遺構でも保存、伝承の仕方に大きな違いがあると感じた。門脇小は次世代に繋がるような様々な展示や工夫が施されていたと思う。これは私個人の感覚だが門脇小は震災後に人の手が増えられすぎていて当時門脇小に通っていた生徒たちや教員たちの情景を想像することが難しかった。博物館を見ているような感覚で得られたものは有意義であったのは間違いないが小学校としての門脇小にリアリティを見出す事が難しく感じた。校庭に生えた木を見た時、この学校は時が進んでいるんだなと思った。比べて大川小は震災から時間が止まっているようだった。空気感が重く目の前で起きたであろう悲劇を想像して打ちのめされた。あまりにも残酷すぎて目を背けたくなったが紫桃さんの話でこれは本当に起きたことだということを自覚させられた。私が門脇小と大川小の空気感の違いを感じ取った背景に当事者、第三者含めた震災遺構への賛否両論があげられると思う。門脇小ももちろん震災遺構とすることに対して様々な思いがあったと思うが、それ以上に大川小について遺族、近隣住民それに外部の人間の複雑な思いが交差していると広々とした校庭にポツンと献花台のような机を見て推論せざるおえなかった。門脇小は結果として学校の指揮下にいた児童の死者はでなかった。でも大川小は悲劇の学校として名をはせてしまうことになる。大川小を震災遺構として扱うことは門脇小と違ってどうしても悲劇の象徴として存在することになってしまい、それは私達外部の人間にとってもそうだが遺族にとっても悲劇の象徴であることは変わらない。遺族は変わり果てた大川小を見て何を思うのだろう。門脇小は多くの命が救われた例として避難の重要性等を語り継いでいくが、大川小はそこで起きた悲劇を語り継いでいく。大川小の遺構に賛成した人にはその覚悟があることは承知だが私にはその事実が痛ましくてたまらない。震災のちょっと前まではどちらの学校も同じ輝かしい笑顔を咲かせていたはずなのにたった一つの地震で明暗を分けてしまうことになるなんて。お話をいただいた紫桃さんは後世に語り継いでいく重要性を体現したかったと同時に娘の存在を風化させない、父親としての使命感と決して消えない怒りあるいは無力感あるように感じた。でも私には悲劇を悲劇で終わらせない、自分が負った苦しみが後世にとって語り継いでいくべきかどうか考えていく余地なんてあるのだろうか。私がもし当事者であったなら大川小を震災遺構として残していくことに対して肯定的になれる自信がない。だからこそ後世といえる私達のために大川小が何を遺していくか批判もあったであろう状況下で考えて残してくれた人達の意志を大切にしたいし向き合っていきたいと思う。

門脇小と大川小の訪問は最初にした私の問いへ大きな知見をもたらしてくれた。震災が起きてからではなく起きる前から向き合って適切な準備をしとかなきゃならない事を強く実感した。これは口で言われても怠惰な私には理解はできても実践しなかっただろうが、スタディーツアーを経て、たくさんの人たちが私たちに遺してくれたものを背負っている自覚ができた。その人たちの思いを無駄にしないためにも学んだことを最大限生かしたい。そしてもし震災が起きてしまった時、その後についてどう向き合っていくか。きっとこの問いには最善と呼べる行動はない、人それぞれ違った答えを持つだろうというのは考えていた。今回のスタディーツアーを通して復興を願う人達に共通することは形は違えど各々の伝承に重きをおいているということが私の中で確信に近づいた。向き合い方というよりもまず向き合っていく事が大事なのだろう。石巻の出来事を石巻だけで完結させず未来を巻き込んで語り継ぐ。これは311に限らず広島やアウシュビッツなどにも同じことが言えるだろう。私はこの授業の最初の課題で復興に終わりはないと書いた。それは広島に行った時の経験も基にしていたがやはり復興の起点となるのは伝承なんだと実感した。そしてスタディーツアーが終わった今、私は間近で宮城の復興に関われて本当に良かったと感じている。

・一日目、石巻へ向かう電車では、「あれが仮設住宅かな」とか「同じような家が沢山あるな」など色々見て考えながら乗っていたが、やっぱりどこか抜けない旅行気分、これが四日間続いちゃうかも、という不安を抱えながら門脇小学校に到着した。そんな旅行気分は、体育館に入った瞬間消えた。

市の資料館である門脇小を見て、案内してくれた藤間さんのいうように、一人一人の心情が分からないため、心揺さぶられなかった。そうだったのかという実態や数字にしか考えが行き届かなかった。藤間さんの「数字の先」という言葉は理解したし、納得もしたけど、だからと言って「こんな想いだっただのかな」なんて想像できないし、できないのが当たり前で、そんな思いなんてしない方がいい。そこで、想像できたなんていうことはとても失礼なことだと思う。それと、戦争の資料館では感じたものがなかった。それは、戦争は、目の前の人は死に、自分は生き残るというのがあり得る。だが津波というのが横の人すら全て飲み込むから、津波が終わった後でしか生死が分からない、終わっても分からない。それに、自然災害だからしょうがないという考えが頭のどこかにあるから、心が揺さぶられなかったのかなと思う。だからこそミート門脇には、心揺さぶられるものがあった。やっぱり個人に干渉、クローズアップ出来る民間の資料館は素晴らしいと思った。

・宝鏡寺でも早川さんの言葉の中に復興はできない。新しい浪江町はできるけど、と語っており実際考えたら確かにそうだと感じた。復興って失ったものを一から作り直すという意味だが現実をみたらそれは不可能だと自分は思った。石巻でも防潮堤を設置することで復興につながるとか国は言っているが、周りは人が住めないエリアなのに防潮堤を設置する意味があるのかという疑問があり復興とは言えないという人もいる。福島でも新しい技術を取り入れることで復興につながると言っている。でも現地の人はそれを求めている事がわかる。今回のツアーでお話してくださった方々は国が進めている復興に対してかなり不満を持っていることが伝わった。そこで思ったのはまず国は復興よりも被災者や現地の人たちの意見を聞き、そこから現地の人が望んでいる復興というのを聞いてから復興に取り組んだほうがいいのではないかと思った。自分は3年間この講座を受講していて、3年間復興とは何なのかを考えていたが今回のツアーで今まで自分が考えていた復興というのが変わってしまったツアーになった。

・復興の難しさは、ただ建物やインフラを再建すれば解決するものではないと思った。震災によって生活基盤を失った人々が地域に戻るには、住まいや仕事が確保されるだけでなく、地域コミュニティの復活が必要に感じた。特に福島では、放射能汚染による健康不安や風評被害が問題になって人々が福島に戻ることや地域で生き続けることのハードルが高くなってしまった現実を知ると、復興には物理的な再建だけでなく、人々の心をつなぎ直す取り組みが大切だと思った。

伝統芸能の復活も、そのひとつだと思っている。震災によって中断を余儀なくされた踊りや祭りが再開されることは、人々に希望を与えるだけでなく地域のつながりを取り戻すきっかけにもなると思った。実際、震災後に東北六魂祭が始まったことには、そうした意図が込められていると感じる。けど、伝統芸能やお祭りの需要があまり外から見ると理解されないこともあるとおもった。文化や芸能は、過去の物ではなくこれから形を変えながら残していくべきだと感じた。

・そんな早川住職を近くで見守ってきた早川さんに「早川住職と早川さんは今の復興をどう思っていますか」と質問をした。そうしたら早川さんは「震災が起きた以上、町は復興できない」と言った。自分は復興があって当たり前だと思っていたが、そもそも復興はできないと思っている人がいるのが驚きだった。そして早川さんは「故郷に戻らなかった復興に対して悲しく思った」と言った。じゃあ復興はどうあるべきなのか。

自分は全体を通して、「復興の主体とは」について考えてきた。早川さんは故郷に戻らない限り復興はないと言っていた。だったら復興をするなら故郷に住んでいた被災当事者（避難者を含む）が主体であるべき。じゃあ果たして今の復興の主体は被災当事者に在るのか。自分は、地域によって差はあるが無いに近いと思う。行政が主体になって「復興」という大規模事業、国策の一種になっている気がする。東日本大震災・原子力災害伝

承館では最後のコーナーで創造的復興という言葉を用いながら工場の誘致や、ドローンやあらゆる機会を使った大規模農園の説明があった。未来を象徴とした最先端の技術を強調としていて、震災で開いた土地が、いわゆる「実験場」になっていると思った。福島イノベーション・コースト構想といった行政が主体になって進めている大きな復興政策もその一つだ。その様子は、まるで「原子力明るい未来のエネルギー」をキャッチコピーにした福島原発かのような。また同じようなことが惨事便乗型資本主義的に福島に入り込んでいると感じた。はたして福島イノベーション・コースト構想で、全国各地に避難した避難者たちは帰りたいと思うのか。避難者にとって故郷はどうだったのか、どう故郷が震災によって壊れたのか。それを行政は考えていくべきだし、被災者当事者・避難者当事者の多様な声をどう拾っていくかが復興のあるべき進め方だと思う。「故郷を大事にしてほしい」、早川さんが言った言葉には、今の復興に対する想いがあったと思う。

福島の様々な復興の形に対して、そのようなことを感じた。防潮堤や大規模公園、交流の難しい施設など。とても開発的で既定路線のような型にはまっていると思う。防潮堤やソーラーパネルによって地元故郷の田園風景のような景観が失われている。そしてこのような復興の賛否によって住民の中で分断、対立も起きている。じゃあ交流の難しい施設（代金が高くて貸し切り状態のような体育館とか）は震災、復興で起こった分断・対立も解消するのか。実際にガンガン除染したりと、行政主導の「復興」をして被災者が不在のまま、町（ふるさと）の姿が大きく変わってしまっている。これじゃ避難者が返ってこないのも無理がない。結局、被災当事者、避難者の声が理解されず、拾ってもらえず、多様な復興になっていない。それは加害当事者のごまかし（創造的復興、理解した気になっている）と被災当事者のあきらめ（帰りたい「故郷」がない、分断、対立）にある。国の伝承館に多用されていた「創造的復興」という言葉自体が悪いとは思わない。また町を目指していく中で、壊れた建築物をそのまま建てる「原型復旧」ではなく、新しいアイデアや技術を取り入れて立て直す「創造的復興」にはとても意味があると思う。しかし自分が目にした福島や東北の復興のどこが創造的かよく分からない。新自由主義的社会にふさわしい形で以前の状態以上の復興していくのが創造的復興なのだろうが、以前の状態にさえ戻れていない人たちが実際にいる。仮設住宅での孤独死や、避難所での震災関連死、ソーラーパネルがたくさんあるふるさとの風景。自分はこれを見て復興しているとは思えなかった。

・浜通地区で現在実施されている 3.11 関連の動きを「復興」と仮定し考える。行政曰く、福島イノベーションコースト構想などが復興である。里見さんのお話を踏まえると過去の教訓を残す伝承活動も復興である。現地で見てきた「復興」は、公、行政は未来のみを、民間は過去を見ているように感じた。前者は震災後、ゼロベースからの復興である一方、後者は今までに地域全体で積み立ててきたものの上にある復興だ。復興と言わない人もいるが、民間の人々考える復興は過去を踏まえた未来をみているように感じた。

まず初めに、公立の原子力災害伝承館は、事実ベースの展示であり、全体を通して「伝えたいこと」は防災と国の考える復興のように見えた。事故前、震災、復興の 3 つ展示の間に壁があるような印象もあった。はじめの螺旋状の時系列展示で最後が「原子力災害伝承館の完成」だったことから考えられたのは、“そこ”が震災後と新しい浜通りの区切りということ、震災と原発事故で崩壊した町をリセットして Re.ゼロから始める浜通り開発の意思表示に思えた。（中略）民間の復興の形を総括すると、直接的な復興事業がある石巻に対し、浜通りは、ただ知らないだけかもしれないが、現地で直接的な復興事業は民間ではほぼ見られなかった。これは推測になるが、浜通りでは行政が避難指示区域を設定し、その更地を東京にある中央政府、行政が彼らなりの復興を行なっているため、民間の復興は直接行えないのではないだろうか、もっと言えば、原発が浜通りに建設された時からほぼ中央の植民地だったかもしれない。行政が今の復興から手を離したら良いというわけでもなく、浜通りの被災状況は比較的復興のゴールが見えやすい石巻と違い、復興のゴールが見えないからこそ、石巻のものわさんや鮎川捕鯨のような賑やかさを取り戻そうということが難しいのではないか。その段階に至っていない、至らないのではないかと感じた。では、このままでは浜通りは植民地のままかという、そうではなく民

間の復興が公の対として存在する事で、現地が中央のものではなく現地住民の意思が残り脱殖民化に繋がる。つまり現地に復興のための伝承と脱殖民化のための施設として復興の拠点があるということに意味があるのだらうと感じた。

・私は誰が悪いのか、と言うのが見えにくいものだと思っていたので、早川さんのように自分に責任があると思っている方がいることに驚いた。だが、3日目にゆめの森の南郷さんが「誰かが誰かに任せていて、全ての国民に原発事故の責任がある」と仰っているのを聞き、腑に落ちたような気がした。直接の関わりはなくとも、むしろ関わらなかった事によって、自分にも少なからず責任はあるんだ、と考えることは大切なことなのでは無いだろうか。多くの人が責任の所在を人任せにしている今の状況は、南郷さんの仰っていた問題点を誰かに任せていた時と同じ状況なのでは無いかと思った。同時に、原子力発電所を安全に稼働できる方法を考えて欲しい、と言う訴えが聞き入れられず、事故が起こってしまった。と言う事と、今公共の施設などが市民の意見を取り入れず議論されずに建設されている。と言う事も同じだと思った。どうして同じ事を繰り返してしまうのか、そこに暮らす人はその危うさに気付いているのに、行政は何故それらの意見を取り入れた復興の形を考えることが出来ないのかとても不思議に思った。

・「復興」については、これについても本当に人一人一人によって、その人の復興っていうものがあって、それぞれ違うものだから、そりゃあ、完結することもないよなと、考えられました。このことについては、宮城でよりも福島の方が、私の中では沢山考えられたように思っていて、私は今まで、復興というのは何千年後には必ず成立するものなのではないかと思っていて、それは、当事者たちがいなくなった後、その当時の地形との大幅に変わった世界で、生きる人々は、私たちの年代で起こった震災とは、直接的な関わりが大きく薄れ、新しい文明社会が築かれると考えていたからです。ですが、福島は原発事故という人災が起こったが故に、これから10万年ぐらい管理しなければならぬ危険なものが置かれ、それによって復興という未来が想像しにくくなったからなのかな、と思いました。それから私は、環状島について学んだ時に、前述した今までの考え方でいうと、当事者も支援者も傍観者も全ての人が海に飲み込まれ、底に沈んで地球に還った後、また新たな文明が生まれ、またそこに住む人々の日常が生まれることが復興なのかなと思っていたけれど、相馬高校の方々の例え原発問題が解決しても、これからずっと、この災害のことを伝承していかななくてはいけないというお話を聞いて、海の水位をなるべく引いた状態にする努力を、ずっと続けていくことこそが、復興への、というか…。伝承への足掛かりになるのか、今まで持っていた考えは、単なる「忘却」だったのかなと考えられました。

このようなことを考えてきて、復興に終わりはないのかもしれない、と考えました。でも、何度も話させていた
ただいておりますが、ゆめの森学園のように、これからの未来に繋げていく行動、活動という、一步一步は踏み出せるのだと学べました。

・今年度は「復興」という視点を強く意識させられた。そして、今後、東北と復興をとったときにもそれは変わらないのかもしれない。しかし、東北と復興を含めた学校生活や日常生活のなかで、歴史のなかの「東北」の特異性を感じたことをあたまの片隅にいれながら来年度含めたこれからを過ごしていくことになると思う。

・まず結論から入るが、「復興」というのは人によって変わり、正しい「復興」の形は存在しない。というのが私の考えだ。このような考えになるまでにいろいろなことがあったものの、今現時点での私の結論はこれである。このような考えになるまでの経緯をいくつか挙げていこうと思う。

この講座を選択し、最初の方の授業にて昨年のこの講座の人たちが製作した壁新聞を見る機会があった。この壁新聞は学発に展示された後に仙台メディアテークにて展示されたものである。壁新聞の中に、「あなたにとっての復興とは？」という質問があり、展示を見た人が書き込めるようになっていた。そこには「元通りの生活が帰ってくること」「前のような活気が帰ってくること」などが書いてあった。その時の私は大きな災害があった後にすべてが元通りになることは現実的ではないな。と思っていて、となると復興する際に目指すべきなのは前

のような活気という部分なのではないか。と考えていた。この講座を取っている人もだいたいそんな考えをもっているような気がした。

考えが変わった最初のきっかけは石巻スタディーツアーだった。いろいろな話を聞いていると、防潮堤に批判的な意見を持っている人が多くいた。防潮堤は津波から人々や建物を守るために作っているとされているが、東日本大震災の津波にて大きな被害が出た地域には人が住むことができなくなっていて、防潮堤が何のために存在するのかが分からなくなっている。という意見を複数人から聞いた。この時に国側は一つの「復興」として防潮堤を作っているけれど、これは必要な物だろうか。と感じた。また住んでいる人たちが防潮堤をつくることに反対していたり、対話を求めているのに対して、応じずに防潮堤を作り続けていることに、私の考えていた「復興」の形はこれではないなと感じた。この時には私の思う「復興」はもともと住んでいた人達がもしくは、もともと住んでいた人と国や政府側が対話を重ねて作り上げるものなんじゃないかと思った。

次に考えが変わったのは水俣病について授業で教わった時だった。水俣湾埋立地について教わったときにもっといい方法があったのではないか、と思った。また、いまだに水俣病の認定患者問題などがあり、これは本当に最善だと思って行っているのだろうか。と不思議に思った。

そして福島スタディーツアーにて自分の中の復興が固まったと思う。福島の東日本大震災・原子力災害伝承館の展示の中に「福島イノベーションコースト構想」というものがあり、端的に言えばロボットやAIなどの最先端技術の実証拠点を作って地域の活性化を目指しますというものだ。最初に私が思っていた「復興」の形は前のような活気を取り戻すというものだったから、この構想だったら昔思っていた「復興」が福島では、行われているということになる。が、これは本当に福島の人々が描いていた「復興」の形なのだろうか。私は福島に住んでいるわけでも、住んでいたわけでもない完全な部外者であるが、この構想にはもともと福島に住んでいた人たちの気持ちが反映されていないのではないかと感じた。ただ、この構想に賛成している福島に住んでいる人だっているだろうし、国側だって一応善意で行っていることだろう。これは「復興」の一つであるということは分かるが、私の考えているより良い「復興」とは違うものだなと感じた。そして宝鏡寺での早川さんが言っていた言葉の「復興とは町が元通りになることだから達成されることはない」という言葉を聞いてなるほど、と感じた。

私は「復興」の事を勘違いしていたのだ。ずっと大きな被害が出るようなことがあった場合に、被害者や国が目指さなければいけないものだと思っていた。今まで通りの生活に戻すことや、街を活気づけることを目指している状態の事を指していると思っていたが、それも一つの解釈なだけで人によって「復興」なんて変わる。その中でより多くの人が納得するより良い「復興」を模索しながら進めて行くのがこれから求められていることなのではないかと考える。

・新しいものを作るということは水俣病や原発と同じように犠牲になる人がでるかもしれない。震災で衰えてしまった産業を再び活性化させることには応援したい。でもその裏で苦しんでいる人が生まれるならそれは復興ではないと思う。授業での「どうすれば水俣病は起きなかっただろう」という問いが印象に残ってる。戦争がなければ良かったのか、国が止めてくれれば良かったのか、チッソの製品を買わなければ良かったのか。誰か一人に責任があるわけではないと思う。でも今の私たちには、同じことを二度とくり返さないために行動していく責任があると強く感じた。また豊かな暮らしのために近代化を進めればいいってもんでもないんだなと思った。

復興への考え方が変わったと同時に、関わり方の難しさを感じた。復興に携わることは思ったよりも簡単ではなかった。さっきも書いたように復興のゴールは人それぞれで、すべてを語れる人もいるし語れない人もいる。だから一部始終を聞いて分かった気にもなれない。関わっていくためには被災者とのコミュニケーションが必要不可欠だと思った。でもどこまで踏み込んでいいのかが難しい。後半の授業では自分にできることってなんだろうとすごく考えた。スタディーツアーで学んだからには伝えていく必要があると思うけど、学んだ情報が多すぎて正直自分の中で消化しきれない気がする。なにかしたとしてもそれは本当に望まれていることなのかとも

考えてしまった。でもそんなことを考えてなにもしなかったらいつのまにか考えることすら忘れてしまうから、授業は終わってしまったけどこれから少しずついいから関わり続けて考えを深めたいと思った。

・最後にこの一年間は、昨年度の学びから生まれた、地域に根ざした復興の形はどのようなものかと言うことや、震災以前の被災地の状況と言った問を基に、様々問題に対して昨年度とは異なる側面を意識して授業に臨んでいました。二年目だからこその中で、被災地では過去津波災害が多発してきたという新たな学びを得られ、災害の伝承の重要性和難しさを新たな観点から実感しました。また、今年度初めて実施された福島のスタディーツアーを通して、自然災害と原子力災害における被害の状況は大きく異なっていることから、復興事業などについて過ぎたこととしてではなく、現在起きていることとして地域住民の望む復興の根本的な方向性について率直な意見を伺えました。そのような話を踏まえて、「復興」について考える中で、単に震災から復旧するという単純なものではなく、元に戻すことができないような被害を受けた過疎地域において、今後加速的に過疎化が進んでいくことが予想される中で、地域の活性化に繋がるような策としてどのようなことを復興として取り組んでいくのかと言うものなのだと思います。その中で自治体の示す形と地域住民の考えていた形が異なり、そのことから対立的になってしまっている状況が現状なのだと考えました。今回は、これに対して今回は、活性化の効果があり地域住民の望む形にも近くなる復興の具体的な形について自分なりに考えました。しかし、それでも効果があり、地域にあったものであるかは、効果を検証したわけではないし、自分は地域住民でもないの、いいものなのかどうかは究極的には分かりません。ただ、この問題は東北に限った問題ではなく、同じように過疎化が進んでいる地域であれば、今後同じような災害が発生した際に、似た状況になる可能性があることから、被災地での復興における課題と類似する課題があるとすれば、災害が起きたかどうかに関係なく現在から取り組まなければいけないことだと思います。そのためにも被災地で進められている復興が今後どのような形で帰着していくのか見守り、考え続けていきたいと思っています。

・私が今、「東北」と「復興」について思うことの中には、学ぶ前と変わった部分と変わっていない部分がある。まず「東北」について。私は講座で学び始める前、「東北」という言葉に「美味しい食べ物がたくさんある」とか「昔から伝わる文化が豊か」といったイメージを持っていた。その時そう思ったのは、今まで日本のことを学ぶ中で知識として知っていたり、実際に自分が東北に足を運んだ際に素敵な体験を沢山したからだと思う。とても素敵な場所であり魅力溢れる場所というその時の「東北」のイメージは今も変わらない部分だ。しかし、学んでいく中で私が「東北」について思うことの中に加わったのは「被災地」という観点だ。学び始める前の私は東日本大震災当時東北で何が起こったのかをほとんど知らなかったし、その事について考えることもなかった。しかし、「環境学」講座で福島第一原発事故について学んで、東日本大震災について知る機会ができて、高校3年生で「東北と復興」講座に出会った。知りたいという気持ちを持って今まで学んできたことはとても苦しくて、衝撃的な事だった。知ることの多さや、難しさに考えることから逃げ出してしまいたくなる時もあった。でもいつも、学び続けなければいけないと思った。なぜなら、実際にあるのに自分に見えていない観点を見つけなければいけないと思ったからだ。(中略)次に、「復興」について。講座の中でずっと考え続けていたことだったが、一年の学びを終えて考える私なりの「復興」は、その言葉の意味に正解はなく、それぞれの思う形があるものだと思った。それでいいのだと思う。しかし、自分の復興の形が正義だと決めつけて進んでいくことが、ある人にとっては良くないものである可能性があることを国の政策や、ツアーで行く先々で聞いた、政策への不満の声から実感した。

双葉屋旅館の女将さんがおっしゃっていた、議論することが大事という言葉が印象に残っている。そもそも復興という言葉の意味の捉え方が違うのだから、その言葉の使い方も違うし、言葉って本当に難しいものだと思うけど、いくらぶつかっても私たちは言葉を使って話していくことしかできないし、だからこそ議論することから逃げてはいけないと思った。

・復興とはどうあるべきなのか。この問いはこの講座を取らなければ考える機会がなかったかもしれない。しかし復興を考える過程で生まれた産物は私にとってかけがえのない学びになった。復興というのは物理的な再建だけでなく人間性の再建であり見つめ直しであるのではないだろうか。そしてそれは非当事者である私にも大きな意味を持っている。災害という大きな破壊を経て揺らいだもの、揺らがなかったもの、生き方や価値観。それを知り考えるということの意味。石巻の閑散とした風景を眺めた時震災前の情景をイメージし感傷的になるが、それは311が自分と切り離せる存在ではなかったからだろうか。例えば200年後の人間が石巻に対して同じように感傷的になるのだろうか。人間の歴史を俯瞰した時私が今いるこの場所も何らかの復興を経て成り立っていてこの土地に思いを馳せた人がいたのだろうが、その人は今この土地を見て復興を果たしたと思えるのだろうか。この講座を取る前のニュースで阪神淡路大震災は復興完了という記事を見て当時の私も国からのその言葉通り復興は終わったんだと受け取ってしまったが、今考えるとそれはインフラや都市などの可視化できる復旧を指して失われてしまったコミュニティや暮らしが元通りになったわけではないのだろう。復興というのは極めて多面的であり一つの視点で捉えられるものではない、文化や精神的なものも絡み合いどこかで対立してしまうことも免れない。そう考えた時、復興というものに終わらないあるいは復興が終わったと誰が決められない。復興の基準は人によって異なり満場一致での復興を実現するのはほぼ不可能に近いのかもしれない。私は復興に対してももちろん人の希望になることだと思うが同時に残酷な側面も存在していると感じるようになった。福島は誰かの犠牲の上で復興が成り立っていると強く感じ、表面上では行政にとっての復興を意味する事業が進められていてそういった事業は無関係な人からしても明らかな復興であるが、上書きされてしまった人達が自分たちの存在を認知させることはとても難しい事を理解した。これは加害構造が明確化されているが被災者の間でも復興観の対立は避けられない。可視化されなかった思いを抱えている人が私の認知が届かない範囲にも大勢いると考えると「語り」が記録以上の意味を持つ事が分かる。復興とは「過去の出来事の克服」という目的だけでなく、「どのように記憶を継承し、未来へとつなげるのか」という問いでもあるのではないのか。震災を経験した人々の思いが時間とともに風化しないようにすることも、復興の一環と言えるのだろうし、自分における復興の解にはまだ自信がないが語りの重要性というこの講座で得られた学びを生かしたい。

・今年度は、復興庁と古滝屋という旅館に原子力災害考証館を作った、里見さんという方にお話を伺った。復興庁では主に風評被害について講習を受けた。復興庁としては、国民に正しい情報を伝え、福島のは安全だと知ってもらい風評被害を払拭したいらしい。しかし、福島の方の考えは全く異なっていた。まず、「風評被害」という言葉は使っていないらしい。「農作物やキノコ類（今でもキノコ類は流通していない）などに実害があったから風評と言っていない。もちろん風評被害対策はしているけれど、福島のを避けている人に対して、『それはダメだ』と非難するのは違う。逆に政府が『風評被害』や『復興』という言葉を使うことによって、国の責任や罪がぼやけてしまうのではないのか。福島だけの問題にされている。」とおっしゃっていた。私はこの言葉を聞いて、とても納得した。被災した人や地域のために復興庁は作られたはずなのに、街の人の考えと違うことをするのは、政府との距離があると感じるし誰のためにやっているのか分からない。また、復興庁で配られたプリントを見ると、「復興した今の街の様子」として駅や除染した土を入れているフレコンバックが撤去された水田の写真が載っている。これだけみると街の復興は完了して、綺麗に元通りになっているように感じる。しかし、実際は駅周辺だけだったり地域のコミュニティーがあまり出来ていなかったりする。石巻のスタディツアーに行ったときにも感じたが、建物が新たに建てられただけでは、少なくとも「復興した」と言えないのではないだろうか。

・もうひとつ印象に残ってるのは駅前で見守ってきた桜まで伐採されてその桜にあった物語まで消えてしまったという話。歴史上に残るような大きな出来事がなくても、町の人々に愛された歴史があるし、そういったものを残すのは大切だと思う。消えていい歴史ってないよと改めて気づいた。「復興」のために思い出を消してしまうのは「復興じゃない」と私は思う。

おわりに

当事者にはなれない。当事者不在で物事が決定することも問題だが、しかし一方で当事者のみに決定をゆだねることもまた問題である。リスクを引き受ける当事者とそのメリットを引き受ける当事者が同じ存在ではなく、原子力発電所の場合にはその電気をエネルギーとして消費する消費者がいる。水俣病におけるチッソも同様である。リスクを引き受けている当事者（時にそれは被害者）はそのリスクを引き受けるかどうかを自己決定し、その結果を自己責任として負うのではない。そのリスクを引き受けやすいように「メリット」を提示した側、あるいはそもそもそのリスクと引き換えに得られるメリットを享受する側の人たちも同様に当事者性を持つべきではないだろうか。被害の当事者にはなれなくとも加害の当事者としての立場もあり得る。過去・現在・未来の被害当事者という立場が存在するならば、過去・現在・未来の加害当事者という立場もとらうるはずであり、そうなったときに自らの未来の被害当事者、あるいは未来の加害当事者の立場を拒否するように考えていくことが、主体の問題として引き受けられる当事者性ではないだろうか。当事者になることはできない。当事者不在の決定でも当事者のみの決定でもなく、自らの主体の問題として捉えることができる当事者性を帯びる人たちにできることがあるのではないだろうか。そうした主体の問題として捉えることができる場面は社会の中にもあるだろう。それは対人援助という具体的な場面の中での出会いを通してかもしれないし、まだ援助されるべき存在として認知されていない未来の当事者を掘り起こす場面で起こるかもしれない。